

か蛇のように私を怖がれば、妻はおろおろ、はらはら。ついには、「いくら非常事態でも、これではあんまりひどすぎる」と、子供のよう泣きべそをかいた。

親は親の、子は子の神経が家じゅうに張りつめて、わが家もその間はまさしく深刻な非常事態に陥っていたのである。

遺体の収容がこれほど待たれた例がない。

だが家族ぐるみで一日も一刻も早く、身を切る思いで祈り続けたのは、遺族は別として私の家族のほかにはいなかったのではなからうか。

Ⅲ 決死敢闘

1

悪夢のような、地獄の応援だった。

夕方までは昏睡状態だったらしい。だが、一か月ぶりの夜は、寝酒がききすぎたのか釣り天井の夢にうなされてか、七転八倒の異常な眠りだったと妻が言う。

絶えず、けものように呻き続けていたそう。そうかと思うと突然大きな寝言で、誰かと、何かと喧嘩を始める。寝言だけならまだしも、手も足も暴れたらしい。

そのせいか、夜が明けても夢うつつで、体のどこにも力が入らない。意識ももうろうとして、起きる気力さえ湧かなかった。

一夜にして、身も心も腑抜けになった。

航空士官学校の野外演習、「決死敢闘」にも似た、まさに地獄の応援だったのである……。

昭和十九年二月、私は県立磐城中学校の四年から陸軍予科士官学校に入学、翌二十年二月には早くも航空士官学校に進んだ。

戦争も末期で、特に航空将校の損耗が激しいさなかである。猛烈な速成教育で、地上教育の総仕上げとなった秩父の野外演習では、現地の国民学校に缶詰めになり、「決死敢闘」という名の伝統的な猛訓練を受けた。

とりわけ私が属したのは、「地獄中隊」と悪名とどろく第十五中隊だった。区隊長はいずれも歩兵科からの転科将校で、航空兵科教官のあいつぐ前線転出にともない、急ぎよ中国大陸の前線から召還されたものである。

彼らは血腥い体臭をぶんぶんさせながら、まるで私怨を一気に晴らすかのように、猛然と私ら生徒に襲いかかってきた。

炎天下の砂利道を完全武装で走らされた。

走れど走れど、休ませてくれなかった。

精も魂も尽きて立ち止まると、要所要所に待ち伏せする区隊長らが飛びだしてきて、「貴様は戦死」と、引きずり倒された。

そのうえ軍刀のこじりで執拗に小突かれ、蛙のように砂利道に這いつくばわされた。

言う言うの体で逃げだしては、死力をふりしぼり、よろよろ、ふらふらとまた駆けた。

沿道の人目も、構ってなんかいられない。

腰を屈め、目をしょぼつかせて哀れんでくれる老婆以上に腰も足もふらつき、顔も汗と涙でぐしゃぐしゃになっていた。

区隊長だけが昂然と胸を張り、衆人環視の中で颯爽と恰好をつけていた。彼らは後輩の私らの誇りや人間性を、完膚無きまで踏みにじって止むことがなかったのである。

「決死敢闘」の仕上げは、二昼夜におよぶ強行軍と夜間斬り込み攻撃となった。

軽機関銃や小銃を肩に、月もなく真っ暗な夜道を黙々と歩き続けた。隊列は伸びたり縮んだり、あるいは左右に頼りなくぶれた。半睡しながら歩いているのである。

折しも遠雷のようなごう音が、突如として秩父連山をどよめかした。地底の百獣が一齐に吠えるようにそれは陰に籠り、またえんえんと続いたのである。なんとも言えない不気味さに、俄に隊列も強張ってしまった。

翌日、何処からともなく、日立市が艦砲射撃を受けたという情報が流れてきた。

ある航空戦術教官が最後の講義で、戦艦一隻の艦砲射撃は重爆一千機の空爆に匹敵するが、その重爆の国内製造能力すら月産四十機台に過ぎないと絶望的に洩らしていた。

そのまま彼は機上の人となった。沖縄海上の米機動部隊への特攻隊長として、鹿児島基地に慌しく飛び立っていったのである。

通信教育の仕上げは、特別攻撃時の暗号打電だった。誰もが特攻隊要員であることは、暗黙のうちに自覚している。

「4・4・2……」（われ、これより自爆す）

と、みんな力任せに発信機のキーを乱打していた。翌日、急に航空分科と飛行操縦者の渡満日程が発表された。敵の空襲が激化したため、満州で飛行訓練するというのである。

私は、「戦闘機操縦」。第一志望だった。

思わず「やったあ」と、快哉を叫んだ。

たちまち胸いっぱい、地獄中隊からやっと抜けだせるという蘇生感が広がった。

私は口惜しがる地上勤務兵科の残留者に別れを告げ、いそいそと航士校に復帰した。

即刻、原中隊から離れ、新編成の輸送梯団のもとで渡満準備に没頭した。まず、小銃を返納した。期せずして周囲から、「これでバタ（歩兵）ともお別れだ」と、歓声が湧いた。

代わりに二尺一寸の軍刀が支給された。

「こんな長い段平では、腹も切れねえ……」

パイロットは出撃時、尺八寸の小刀を携えて特攻機に乗り込んでいた。そのため、我も我もと小刀を郷里に注文した。

私も、母に無心した。母はそれを抱くようにして、あたふたと学校に駆けつけてきた。

すぐ手に取って見たが、いささか軽薄短小で重厚感や風格が欠ける。銘も入ってない。

ためつすかしつ眺めていると、母が、「急なもんだから、間に合わなくてねえ」と、伏し目がちに弁解しだした。そして、

「婆っばちゃんの、脇差しなんだよ。どうかねえ、そんなもんで役に立つかえ……」

と、不安げに私の顔をのぞきこんだ。

「……!?!」

私は、絶句した。語り草にもなっている祖母の凄さを、不意に突きつけられた感じだ。

物には不足があるが、時間がない。何よりも、母を困らせることができなかった。

「人を斬るんじゃねえよ。敵地に不時着したときの自決用なんだ。これで結構、結構」

何気なく言ったつもりが、母をひどくうろたえさせてしまった。みるみるその顔がくしゃくしゃに歪んだかと思うと、あたりをはばかるほど、肩を落として口をつぐんでしまったのである。

鬼をもひしぐ姑に仕え、絶えず小さくなって過ごしてきた気弱な母である。軍国の母たれと言っても無理な注文で、その後は前にもましておろおろしだし、何とも締まらない母と子の別れになってしまった。

七月三十日、私ら士官候補生は舞鶴に集結して、大型輸送船に乗り込んだ。

すると出航直前、抜けるような青空の一角から、こつぜんと敵グラマン編隊が姿を現わした。と見る間に、敵は湾内の他の船には目もくれず、私ら目がけて殺到してきた。

この集中攻撃で船は大破（のちに沈没）、輸送指揮官と三人の士官候補生が爆死した。

私は直撃弾の爆風を受け、中甲板から船倉の大豆袋の上に吹き飛ばされた。直前まで私のそばにいた戦友は、大腿部をすっぱり切断されて息絶えていた。

この敵襲は女スパイの通報によるものだという噂が広まった。私らを満載した特別列車が品川駅を出発してから、二度も敵艦載機から狙い打ちを受けていたのである。

結局は、次便を待つうちソ連が参戦、渡満は中止となって帰校の途についていた。

ところが何故か航士校で門前払いを食らい、私らはまた秩父の国民学校に押し込められてしまった。ときに八月十六日の早朝、何が何だかさっぱり分からない。

やっと帰校を許され、原中隊に復帰したのは八月二十三日である。移動に次ぐ移動の、大放浪の果てが忌まわしの地獄中隊だ。疲れる以上に、私はうんざりした。

地獄中隊は、以前の殺気や狂気はどこへやら、放恣なほど自由気儘な空気に包まれていた。僚友たちは憑き物が落ちたように、さっぱりとした顔付きなのである。

勝手がちがって当惑していると、彼らは、

「貴様たちがいたら、もつと混乱したろう」

と、終戦の経過をこもこも説明しだした。

怪情報が乱れ飛んでうすうす気付いてはいたが、航士校に渦巻いた徹底抗戦の妻まじさにはびっくりした。秩父に隔離軟禁されていた理由が、初めて判明したのである。

終戦前夜のクーデターに、他中隊区隊長の上原重太郎大尉が参加、近衛師団長を斬殺していた。その処分をめぐって校内は荒れに荒れ、大尉が割腹自決して抗戦派も鳴りをひそめたばかりだという。

驚くことばかりだが、大尉の介錯人がこの中隊のAだと聞いて、二度びっくりした。

A大尉は地獄中隊のえん魔王的存在で、短軀ながら柔剣道五段だ。顔も体も毛むくじゃらで、らんと光る眼光は野獣そのもの。私らをしごく場合も白い歯を見せ、いつも加虐的な嘲笑いを浮かべていたのである。

(彼にそんな資格があるのか。彼はどんな死生観を持って大尉の首を刎ねたのか?)

上原大尉の自決には、何かしら透徹した死生観があり、肅然と襟を正さずにはいられない。その死が汚されたような気がして、私はしばらくは釈然としなかった。聞けば介錯後、A大尉は異常な昂奮状態に陥り、獣のような咆哮をあげながら当てどもなく校内をさまざまに迷っていたそうである。

私の中で、子科士官学校以来模索し続け、あるいは曲がりなりにも温めてきた死生観が音を立てて崩れていった……。

解散前夜、区隊長が最後の訓話を行った。

いきなり、黒板に、

(天皇は、現人神にして、絶体なり)

と、書きなぐった。

そして「皇国史観」を、えんえん三時間にわたってぶちあげた。声涙ともにほとぼる熱弁、全身を震わせての悲壮な熱演だった。

若冠二十四歳の中尉だが、彼もAに追隨して、私らをなぶり責めにした人間である。

心服できる相手ではなかったが、時が時だけに、痛いほど身にしみた。

それ以上に、日本はどうなるという切羽詰まった危機感が、初めて彼と同体にさせた。彼が絶叫するように、天皇は神以外の何者でもないと思つた。真実、そう思つた。その時間、猛しごきの恩讐も忘れ、私は彼と同じ熱に浮かされていたのである。翌八月二十五日、私ら中隊生は、隊舎の前庭で輪になり、最後の軍歌演習を行った。

「望めばはるか 漂渺ひょうびょうの

七洋すべて 気と呑みて

悠々寄する雲海の

果て玲瓏れいろうの 芙蓉峰ふようほう

ああ八紘はつこうに 天翔てんかける

男子の誇り 高きかな

別離の歌は「航空百日祭」。

誰の目にも涙が溢れていた。それを拭う者はいない。どの顔も、くしゃくしゃだった。歌い終わると、どっと輪が崩れた。

「泣くなあ……、負けるなあ……」

「死ぬなあ。耐えて、耐え抜くんのだあ」

「決死敢闘、決死敢闘、決死敢闘！！」

雄叫おたけびと怒号が乱れ飛んだ。

悲鳴にも似た絶叫も飛んだ。
最後はまた幾重もの輪となって、決死敢闘の大合唱が地獄中隊を揺るがした。
私の、十八歳の夏は終わった。
暑くて、長い長い夏だった。

2

私ら陸軍最後の航空士官候補生たちには、恩給もなければ一片の卒業証書もない。
私は、祖母の脇差しと支給軍刀だけを、後生大事にひっさげて郷里に舞い戻った。

私物類はすべて舞鶴湾の藻屑となり、それだけが、生まれながらにして激動の「昭和」の海に投げだされた昭和二年生まれが、精いっぱい生きた十八年の証なのである。粗末にはできなかった。
米軍の命令で、それも没収された。

「士官学校出の職業軍人は、一番呪まれてんだから……、さっさと、早く出してくらっせ」

区長の言い草が、敗残の身を切り苛さいなんだ。

刀はおろか、私も厄介者扱いだ。

陸士に合格したときは、開村以来の快挙だと、総出で門出を祝ってくれたのである。

支給の軍刀は役場に放り出してきたが、脇差だけは裏山の土深く隠匿した。

刀を手放すと戦争や陸士へのこだわりは急速にうすれたが、たがはずれて気持ちしがしどけなくな

り、何をするのも嫌になった。また、何をしても手につかない。果ては、世間の何も彼もが嫌になってしまった。

そうなるも秩序や規律、あるいは命令に慣れすぎた心と体ほど始末に困るものはない。ただただ途方に暮れるばかりである。

おそまきながら再進学の腹を固めたのは、師走の半ばである。手っ取り早く学資を稼ごうと常磐炭鉱に赴き、何食わぬ顔して、長蛇の列をなす坑夫志願の群れに紛れこんだ。

しかし、高小卒とした学歴詐称は、憲兵あがりのような労務係に見破られ、あっさり門前払いを食いそうになった。

慌てて、どんな仕事でもいいと粘ると、

「発破屋なら、すぐにでも採用してやるぜ」

と、労務屋がニヤリと笑った。

聞けば、運搬から爆破作業まで、ダイナマイトを専門に扱おう新設職種だという。彼は、

「かなり危^スえがな……」

と、私を見てまたニヤツとした。

その二度の嘲笑いが、私を挑発した。

一度も羽ばたくこともなかったが、いずれは爆弾抱いて死ぬ運命だったのである。

(なめられてたまるか！ 決死敢闘！)

私は、即座に受けて立った……。

聞きしにまさる危^スい荒仕事だった。また、想像をはるかにこえるきつい重労働だった。

入坑時はダイナマイトをぎっしり詰め込んだドラッグロス袋を背負い、肩からは雷管つきの導火線箱を吊るし、片手にはガス検定の安全灯をぶら下げる。そんな物々しい重装備で、斜坑を疾走する炭車に飛び乗って現場に急ぐのである。乗り損ねたら一巻の終わりだ。

現場では、幾つもの切羽から、ひっきりなしにお呼びがかかった。

蚊取り線香で点火する時代で、線香の火が天井からの湧水で消されることもあれば、導火線が湿^し気^けつてつかない場合もある。それで点火に手間取り、命からがら逃げて坑道に這いつくばる。もう駄目だと観念したのも、二度や三度ではなかったのである。

毎日が薄氷を踏む思い、毎度毎度が悲壮な思いで一年間、発破、発破で明け暮れた。

その間、坑内で働く人間たちに初めて接して、感動もすれば貴重な勉強もした。

特に、先山^{さきやま}と呼ばれる坑夫の動きや姿に舌を巻いた。彼らはヤマを生き物として崇^{あが}めも恐れもしながら、果敢にそれに挑んでいた。またヤマのちょっとした変化や兆候で、素早く対応を組み立ててしまう手順や要領は、経験を積んだとはいえず実に見事だ。動きは少しも無駄がなくて、流れる絵にもなっていた。

その先山と一体となり、禰一本でヤマに挑む後山^{あとやま}たちの裸像も、流汗淋漓^{りんり}として眩^{くら}ゆいばかりだ。

「労働は神聖なり」などというはやり言葉も白々しくなるほど、それは迫力もあれば説得力もあったの

である。

また、多分に抑圧的で封建的な勞使關係を想像していたが、それも全くない。坑夫たちはみんな屈託がなくて、いかにも生々潑刺はつらつとしている。そして先山を中心に、家族的な結束で現場や現場監督ジヤクを守り立てていた。

そんな彼らの中にとると、語り継がれてきた暗い炭坑史もふと掻き失せる。そればかりか何気なく過ごしていた郷里の真下に、かくもおおらかな現場と人間關係が実存していたのかと思うと、感動的興奮すらおぼえた。

坑外なつかと比べると坑外おつかの人間たちや環境は猥雑で、ついに馴染めなかった。特に私が入ったころは戦後勞組の草創期で、組合の統一と主導権争いで大荒れに荒れていた。

なにしろ、占領軍の肝いりで公布された労働組合法で、一挙に六つもの勞組が乱立したのだからたまらない。全く幼稚としか言いようのない馬鹿騒ぎが、毎日のように、あっちこっちで頻発していたのである。

学資稼ぎとしては厳しい選択だったが、何かにわが身をぶつつけて完全燃焼しなければおさまらないような、破滅的な衝動がだいぶ作用していた。「働かざる者食うべからず」という、はやりの思想にもかぶれていた。

そんな若気は、ヤマの重圧と激しい重労働でたちまち吹っ飛んだが、過去の何も彼も汗と一緒に洗い

流したという点では、転機転生の何よりのみそぎとなった。

「また、この炭碓やまに戻ってきなよ」

坑夫たちが、口を揃えて言っていた。

発破作業の合間には進んで彼らに手を貸して、一緒に汗を流してきたのである。口や柄は悪いが実に素朴で人情味があり、私の送別会まで開いてくれたのである。

しかし私は、畑ちがいの第二高等学校（旧制、仙台）の文科を目指していた。

炭碓はその延長線上には見えてもいなければ、遠く思案の外だった。

それにまだ十九歳。これからが自前の青春だとばかり、炭碓に背を向けるや一目散に専用線を駆けだしていた。

3

二高文科の夢は、祖母の一喝で粉碎した。

「文科、文学部!? 尻こくでねえ、そんたらもんで飯食めしえつか。やくざな考え持つでねえ」

祖母の図式では文科イコール物書き、イコール墮落、イコールやくざ者となるらしい。

「それよっか、これからは炭碓が一番だ。鉱山学校さ入って、常磐の職員になるべし」

祖母の現金さに、私は呆れた。

国の優遇策で、一躍炭碓は世間の表舞台におどりでた。純農村を誇っていたわが村の草木も、いまや

炭^ヤ破へ炭^ヤ破へとなびきだしていたが、私が無断で発破屋になったときは、「食い詰め者でもあんめ」と毒突かれたのである。

「婆っばちゃんの言う通りだよ。そうしっせ、そうしておくれ。私を困らせないでしてくれ」母が、またしてもおろおろしだした。

祖母と私の間が険悪化すると、いつもこうして私は母に懐柔されてしまう。

それほど祖母の権力は絶大で、八十になっても財布の紐をがっちり握って放さない。普段は鼻筋の通った上品な美人相だが、いったん怒りだすと阿修羅のように荒れ狂うから、男たちでさえ下手に逆えないのである。

顔も気性も曾祖母譲りである。そのためか曾祖母とは犬猿の仲で、主導権争いの壮絶な母娘喧嘩が絶えなかつたらしい。

ひどいときは近所の男衆が総がかりで、二人を布団で簀巻きにして引き分けたこともあるという。そのあと母と娘は平の料亭に繰りだし、隣り合わせの部屋に陣取って、芸者を揚げてのどんちゃん騒ぎを競演したというから物凄い。

圧倒的に女が強い家系で、三代続いて当主が若死にするほど、男たちの影はうすい。

母は三代目に嫁いできたが、次男である私の父と逆縁を組まされた。それも祖母の一存で、母は抗し切れなかったが、父は祖母から軍資金をせびって平で呉服屋を開いた。

江戸は浅草で磨きをかけたいなせな着流し姿が玄人筋の女性に受け、店は大繁昌した。だが無類の祭

り好き遊びが好きで、乳飲み子の私を抱いたまま芸者置屋に居続けたこともあるらしい。スポンサーでもある祖母が置屋に怒鳴りこみ、双肌ぬぎで父と芸者に大説教したという話を母から聞いていた。

そんな大尺遊びが、経済恐慌以上に屋台骨も父の体もむしばんだことはいなめない。父の没後、私ら母子は祖母の許に転がりこんだが、母は言わば出戻りの嫁である。五十の半ばを過ぎても祖母に頭が上がない。

さらに祖母が手塩にかけた総領孫（私の異父兄）が、中学を卒業するや、母方の伯父を頼って南洋のジャワに出奔してしまった。

伯父は会津中学の一期生で、製糖事業に成功して東ジャワの日本人会長をしていた。子どもに恵まれず、かねてから異父兄を後継者にと食指を動かしていたのである。

祖母が激怒し、母が窮地に陥ったのは言うまでもない。それからというもの祖母は、孫の出奔も母の手引き、野木家の男運の悪さも母のせいと決めつけ、酔えば母を厄病神のように貶^{けな}めした。

私が祖母に反抗的になった訳でもあるが、母は事ごとに、「婆っばちゃんと父ちゃんの悪い血ばかりがお前に集まってしまった」と歎いていた。祖母と父と、両者に通ずるのは破れかぶれの破滅的な血だろうか。母は、「どうかこれ以上、私を困らせないでくれ」と、いつも愚痴まじりの叱^こ言^ごで私の暴走を抑制していたのである……。

節操もないような祖母の現金さには腹が立ったが、楯突いて喧嘩になれば、「こんなわらしに育てくさって……」と、祖母の罵^{のの}言^ご雑^{ぞう}言^{ごん}が母に飛ぶのが目に見えていた。

私は、涙を呑んで方向転換を決めた。

ちなみに実兄は祖母が褒めるほど、私とは似ても似つかぬ素直な優男である。すでに中国から復員していたが、祖母のお膳立てに忠実に従って国鉄入りしている。この時点、異父兄は音信不明で、ひょっこり帰郷して祖母を狂喜させたのはこれより一年後である。

4

昭和二十三年の四月、私は、官立秋田鉱山専門学校の採鉱科に入学した。

秋田鉱専は蛮カラで知られていたが、中でも「採鉱科」は、昔から悪名が高かった。

入学時の平均成績は学年最高だが、卒業時は最低だという。伝統的に、酒と喧嘩だけ強くなって卒業していくという定評もあった。

ところが私は「史上最悪」と、のっけから教官に決めつけられてしまった。

総勢四十名だが、かなりとうが立った新入生が大半だ。私のような軍校組のほかに、戦後進路に迷って道草を食った者が多かったのである。中には芸者のツバメになって、二年も留年している豪の者がいた。

出席者は、常時半数にも満たない。そればかりか、ときどき授業を貰い下げでは、集団で出稼ぎにしていた。教官に休講をねだるのは、いつも副級長の私の役目だった。

試験時は仲良く、堂々とカンニングした。

監督教官らは見て見ぬ振りするか、窓際に椅子を寄せてうたた寝していたのである。

素質的にも素行的にも最悪だが、学校側も学制改革の過渡期で、私らを売れ残りの大型在庫品並みに持て余していた節がある。講義は総じて、空疎で散漫なものだった。

ひねこびた新入生の勢いは寮まで及び、下克上にも似た新旧勢力の逆転構図さえぎし始めた。こけおどしの上級生の寮歌指導も、軍歌演習で鍛えた私たち軍校組の蛮声と気迫に押しまくられて、すぐ沙汰止みとなったほどである。

寮生の大半が、金にも食にも飢えていた。

参考書よりは自炊用の飯ごうと鍋、そして電熱器が必需品だった。学校に行くよりは、アルバイトと闇米の買いだしに身を入れた。

自炊は人目を避けたり、誰と組むかと相手の懐工合を探り合ったりでひと苦労だ。それで付き合いの濃淡が変われば、コンビ解消の部屋替えも珍しくなかったのである。

アルバイトの中では、老舗の薪伐採と運搬が長期的に安定し、稼ぎもよかった。

秋田フキの収穫と八橋油田のトロッコ押しは、泥塗れにはなるがいちばん金になった。

軽作業が多かったのは商店や町工場の倉庫整理で、人目を気にしなければ映画館のポスター貼りや立看板の回収にありつけた。

家庭教師の口など全くない当時で、頭腦的で最も羽振りがよかったのは闇米の担ぎ屋である。仲買人と組んで、秋田と東京の間を汽車で頻繁に往復していた。

一度だけだが、私は大八車の陸送を請負ったことがある。発注者は秋田市内の鍛冶屋で、三台の大八車を土崎港まで運んだのである。

一度で済ませようと数珠つなぎにしたが、四つ角を曲がりきれず立ち往生してしまった。

通報を受けた警官が、自転車で駆けつけ、「あいん。何してたのだあ。お前のおかげで、ホラ、車っこ、みんな動げねべーやあ。あいん。全ぐ仕方ねごどう……」と、わめきちらしてきた。

私が、「腹べこなんで」と謝ると、彼は、

「あいん、鉦専の生徒だすか……ンだば、仕方ねしなあ……」

と言って態度をやわらげ、交通整理も大八車の後押しも汗だくでやってくれた。

そればかりか、町はずれの一本道まで、わざわざ見送ってくれたのである。

なんとも親切な警官だった。

この年の六月から新聞連載小説、「青い山脈」が登場した。若人たちの新モラルと古い世代の確執をユーモラスに描いたもので、斬新かつ爽快なロマンスが世間を沸かせた。

舞台は同じ北国だが、常時腹べこでは、寮歌で歌い継がれてきた学生ロマンスのかけらもない。それどころか、私たちの青春のロマンスは、いつも飯ごうの底にへばりついて氣息えんえんとしていたのである。

夏休みには、単身、北海道の夕張炭砒に出掛け、坑内採炭夫として荒稼ぎした。

長壁式採炭現場で、比較的軟らかな炭層だから破岩機で容易に掘り崩せる。発破は必要としない。ピ

ックやスコップ使いはすでにお手のもので、たかが学生と見縊っていた先山がたちまち目を丸くした。

一度、やくざな坑夫にからまれ、せまい切羽で喧嘩沙汰になった。航士校仕込みの直突一本で相手の胸を突いたら、他愛なく引っくり返ってしまった。先山の仲裁でその場はおさまったが、先山が「相手は流れ者だから気をつけた方がいい」と、私に耳打ちした。

数日後、喧嘩相手からお呼びがかかり、彼が住む独身寮に恐る恐る乗り込んでいった。

驚いた。彼の部屋は渡り坑夫や流れ者の巢窟で、その中に、常磐炭砒で顔馴染みの坑夫がボス格として紛れこんでいたのである。

彼は小関という先山見習いで、やくざの女に手をつけて常磐を逃走したものである。まさに奇遇で、彼は「やっぱり野木大将だったのけえ」と相好を崩して喜び、早速車座の酒盛りで私を歓待してくれた。

「な、お前ら。発破屋で鳴らしたお方だぞ。下手すりやダイナマイトでぶっ飛ばされっぞ」

小関の派手な売り込みには辟易したが、おかげで一件落着、無事一か月のアルバイトを終えた。その間、空きっ腹も十分満たした。炭砒には加配米制度があったうえ、寮での坑夫の食事は質量とも別格だったのである。

秋には寮祭のプロデュースを任せられ、創作舞台劇や裸踊りで会場を沸かせた。浮かない顔をしていたのは、のさばる下級生のお手並み拝見と高を括っていた上級生だけである。

冷かし半分にラグビー部をのぞいたが、引きずり込まれて抜けられなくなってしまった。常時、定員

不足だったのである。

近所のラグビー名門校、秋田工業とよく練習試合をしたが、OBが後輩の胸を借りているようなもので、いつもいいようにあしらわれて勝負にならない。なにしろ敵は栄養満点の健康優良児ばかり。欠食児の私らは戦わずして圧倒され、ノーサイドの笛とともに、長々と枕を並べて地面にのびていた……。

暮れの寮長改選で、二年生を押しつけて私が選ばれるというハプニングが生じた。三年生の全票が私に集まってしまったのである。

私は、クリスマスチャンで二年生の次点者にその座を譲り、副寮長として彼を補佐した。

ところが寮長は信仰三昧の明け暮れで、寮費徴集や配給米の受領、果ては配給米に混入する雑穀や副食の調達など、下世話な労役には全く見向きもしない。私一人がかげずり回り、大八車の後押しや農家のたずね歩きまで一手に引き受ける羽目になったのである。

二十三年春、私は一年生の入室を機に、寮環境の肅正と改善に手を染めた。

仕送り組の寮生の自堕落ぶりは目に余っていたが、それにつけこんだ不良OBや担ぎ屋の出入りが激しくなり、寮は半ばそれら放埒グループの根城と化しつつあったのである。

まずOBを含む不良グループの排除にとりかかったが、この荒療治はすぐ寮長からクレームがついた。彼は理想寮実現の提唱者でもあるが、それもお題目だけで、いざとなると、

「暴力は神が許しません、神が許しません」

と、私の足ばかり引っぱるのである。

私はサジを投げ、寮改革は頓挫した。

すると五月半ば、肅正の槍玉にあげていた寮生とOBの二人が、窃盗で検挙されるという事件が発生した。深夜、秋田駅前の倉庫に忍び込んで衣料品を盗みだしたもので、主犯のOBは飲み屋の女の紐となつて二年も秋田に居残っていた悪玉である。

私は頭を丸めて秋田警察署に日参、寮生を貰い下げるとともに、学校側ともかけあつて軽い停学処分を済ませた。主犯のOBには弁護士をつけ、自らも証人台に立って減刑を陳情、どうにか執行猶予をとりつけた。

一件落着後、直ちに寮長と絶縁、私は寮を去って下宿生活に入った。

彼は、都合が悪くなるとすぐ背を向け、壁にお祈りを捧げるのが決まりだった。

この事件処理の間も、見事と言つていいほど、全く目もくれなかつたのである。

5

下宿は旧佐竹藩の城跡、千秋公園本丸広場の東南端に竹む二階建ての「香雲亭」である。

寮監の独乙語教官の紹介だが、教官は市長夫人の依頼で下宿人を探していたものである。

「環境絶佳、人生勉強に如くはなし」

彼は太鼓判を押して、私に推奨した。

物静かな上品な老姉妹が細々と営業していたが、ほとんど開店休業の状態だった。下宿生は私だけで、二の丸広場を見下ろす六帖の角部屋があてがわれた。教官の言やよし、またない閑静な環境だった。

食事が垢抜けていた。満腹する量にはほど遠いが、一人膳に並ぶおかずの皿数が視覚的に不足感を補い、うるおいも与えてくれた。それに女主人たちは下宿生を置くのは初めてで、多分に戸惑い気味の家庭のおこぼれに恵まれた。そんな物の出し過ぎや出し惜しみを責め合うのか、老姉妹が額を寄せてささやき合う風景をととき垣間見た。わが事かと思えば微笑ましくもくすぐったい。

食事がらみの寮生の陰湿な葛藤ばかり見せつけられた目には、そんな光景も十分栄養になったのである。

秋の彼岸すぎ、美人の誉れも高い市長夫人と道端で会い、恭しく下宿の礼を述べた。

「そうですか？ たんと、勉強してたん」

夫人は嫣然、かつおっとり微笑った。

彼岸も過ぎると、北国の秋は駄足でやってくる。日も暮れかけると本丸広場は人足も途絶え、静けさと寒さが硝子戸越しに部屋にしみ入ってくる。そして香雲亭は、老姉妹のしわぶきが伝わってくるほど静まり返る。

そんなある夜……。

不意に天井で、畳のきしむ音がした。続いて、切なげな女の悲鳴が聞えた。

思わず聞き耳を立てた途端、荒々しい震動とともに、女が断末魔の悲鳴をあげた。

「……!？」

私は息を呑み。息を殺した。

いくら唐変木でも、真上の部屋の事情ぐらひは察しがつく。そればかりか、もはや私の妄想は、天井を突き破って二階に雪崩込んでいた。

(人生勉強に如くはなし……?)

粹人を通る教官の笑顔が、目に浮かんだ。

(たんと勉強してたんへ……?)

市長夫人の微笑には底がなさそうだが、こうなると変に仇っほくて謎めいてもきた。

もう、勉強どころではなかった。夜ともなれば妄想のとりことなって天井にばかり気がいき、おぞましくも難解な人生哲学に私はたちまちのめりこんでいった……。

木枯らしが吹き始めると密会目的の客足も途絶えたが、私は思いも寄らぬ人物に見込まれてきりきり舞いした。

彼はロマンスグレイの初老の紳士で、母校磐城中学の同窓会長、かつ中学同級の高橋庄太郎の叔父と名乗り、鉦専の学務課経由で私の前に現れた。

高橋は、湯本は白鳥温泉の喜楽屋の若旦那である。

高橋が家出したが、秋田行きの切符を買ったという情報を得て飛んできたという。同窓会長は、お門違いと分かると肩を落とし、「明日は盛岡工専の塚本君を訪ねてみるか」と言う。

クラスはちがうが、塚本も同期生である。

捨ててもおけず、私は一夜の宿を提供すべく彼を香雲亭に案内、女主人に頼んで二階の一室をあけてもらった。その返礼だと称し、彼は私を川反の料亭に誘い、芸者を呼んで豪華な夕食をおごってくれた。川反は、秋田を代表するような一流の花町である。もちろん貧乏学生には高嶺の花、私は彼の大盤振る舞いを蕩然と堪能した。

遊び慣れたスポンサーの散財は三千円、私の下宿代の二か月分である。それを彼は、私の目の前で無難作に支払ったが、まだ財布にはぶ厚い札束がぎっしり詰まっていた。

翌朝、人の気配で目を覚ますと、彼が枕許に端座して思案に暮れていた。

聞けば昨夜の帰途、うかつにも財布を落としてしまったという。盛岡に発とうにも発てなくなり、私に五千円ほどの金策を頼もうかと、考えあぐねていたというのである。

私は寮に駆け込み、寮長を脅して五千円を寸借した。借金は電報為替で送金してくるはずだからと言うと、寮長も渋々納得した。

同窓会長は、おうような態度で私から金を受け取った。秋田駅の改札口でもおうように私に礼を言い、ゆつたりとした足取りでホームに消えていった。

それっきり……。それっきり梨のつぶて。待てど暮らせど、為替はこない。

彼は自称ボストン大学出のインテリで、会話の合間に流暢な英語を意識的にはさんでいた。その英語とロマンスグレイに眩惑され、私は疑うことも知らずひたすら待ち続けた。

だが十日も過ぎると、矢も盾もたまらず、私は帰郷して喜楽屋に直行した。

なんと高橋は、びんびんして帳場にいたではないか。どだい極楽とんぼの若旦那で、家出なんかとは無縁なお人好しなのである。

事情を話すと、高橋が絶句した。その人物は半年前の長期逗留者で、ふとしたきっかけで同窓生名簿を貸したというのである。

もはや絶望的だ。その足で母校の教師をたずねると、同窓会長とは真っ赤な嘘、全国を股にかけた学生専門の詐欺師で、同窓の被害者はすでに数人もいるという。

私はトンボ帰りして、秋田警察署に被害届を提出した。事情聴取した警官は楽天家で、

「あいん、仕方ねしな。まんずまんず、手がこんでるごど。これだば新^{みち}手の知能犯だしな」と、犯人の口口に感心ばかりしていた。

地方新聞までが見出しで、「まんまとしてやられた敏専生」と茶化す始末。そればかりか私が、『蔵書数十冊を売り払って借金を返済した』と、誇大報道のおまけまでつけてくれたのである。

蔵書は有島武郎の全集十二冊で、あとは二足三文の教科書とノート類。売ったのではなくて、それらと寝具類、果ては電熱器や飯ごうなどを洗いざらい大八車に積んで、学校の近所の質屋に押しかけたの

である。

学生証も、質屋の亭主の前に放りだした。

借りずにおくものかと、店先に座りこんで粘りに粘ると、さすがの亭主も音をあげた。

「鉦専は上得意だすものな。仕方ねべしや。ホラ、持っていいたら、えでねすか！」
最後は亭主も、破れかぶれだった。

かくしてまた冬休みは、北海道の炭坑にもぐって荒稼ぎする羽目になった……。

6

昭和二十四年二月、全国的な学園の急速な共產化に、米軍々政部は異例の警告を發した。いよいよ占領政策は、日本を防共のトリデとする方針を鮮明に打ち出したのである。

世界を二分する冷たい戦争が俄に加速するさなか、学制改革も大詰めを迎え、鉦専と秋田師範校の鏝^{つば}迫り合いも激化していた。

鉦専が単科大学への昇格に執念を燃やせば、師範側は街頭に繰りだし、鉦専を巻きこんだ総合大学の誘置を訴えていたのである。

すでに師範校は過激派に牛耳られ、前年九月に結成された全学連の手中にあった。

鉦専も風前の灯だった。学生自治の動きが急に表面化する一方では、共產分子の暗躍も次第に尖鋭化しつつあったのである。

私は香雲亭を去り、また寮に舞い戻った。

詐欺事件のダメージが大きく、経済的に下宿生活が続けられなくなったのである。

同級生の高田^{みつ}満が、すかさず私の部屋に割り込んで来た。だが、川反芸者のツバメで住所不定という礼つきだ。ただ伊豆の料亭の跡取りとあって、万事に鷹揚^{おちよう}で憎めない。評判の人気者でもある。

彼も同じラグビーのスクラムメンバーで、タックル相手を吹っ飛ばし、あるいは引きずって突進する馬力は重戦車そのものだ。いつもふらりとグラウンドに姿を現わすが、試験時以外は教室に出てこない。

「大学には残りたかねえ。今度はまじめに卒業すつからよ。此処に置いてくれよ、なあ」

同居をせがむ言い草もふるっている。彼がその気でも、新制大学の方が受けつけまい。

飛んだお荷物が舞いこんだが、風のように現れ風のように消える風来坊だから、さほど気にならな
い。大きないびきで目をさますと、いつ戻ったのか、芸者もぞっこんという逸物を帆柱のように立
っている。

彼は象牙の麻雀牌を風呂敷に包んで、転々と渡り歩いて来た。言わば麻雀牌のレンタルで一宿一飯に
ありついていた訳だが、私は彼に麻雀の集中的な特訓を要求した。

彼は、「本気かよう」と目を丸くしたが、本気も糞もない。詐欺師に赤子のようにひねられたのは社
会的免疫性の欠除だとして、「毒には毒」と聞き直ったのである。私は麻雀にもめりこめば酒にも溺
れ、猥雑な寮環境に我と我から急速にまみれていった。

いったんそうなると、呑む打つは祖母譲りか腕をめきめきあげて、麻雀は師匠の高田がたじろぐほど

勘が冴え、勝負度胸もついた。そしてそんな逆噴射に驚いたのか喜んだのか、急に私のまわりは人集りがしてきて、部屋は昼も夜も玉石混交の賑わいを呈した。

二月半ば、学生会々長選出の学生大会が開かれた。従来、学生会は他学科の進歩的學生らが主導的役割を占めてきたが、彼等がこれを機に一気に自治会に移行させ、あわせて学外組織と連携するという噂がしきりだった。

その種の会合には見向きもせず、政治向きには全く無頓着だった採鉱科が、このときばかりは長い眠りからさめたライオンのごとく大咆哮をあげた。そんなもの踏みつぶせとばかり、大挙して講堂に押しかけたのである。

これに学内の無頼派や、運動部の連中が合流したからたまらない。急進派は戦わずして降参、学生会はたちまち採鉱科に強奪されてしまった。そればかりか、私は知らぬ間に新会長に祀りあげられてしまった。麻雀も半ばで召集され、私が講堂に駆けつけたときは、すでに大勢は決していたのである。

私は壇上に押しあげられた。止むなく、

「反流行、超俗の精神こそわが校の伝統。頑冥にして古色蒼然たる最後の鉱専生たれ」

と檄を飛ばし、急進派の独走を断った。

ときに大学昇格問題は終盤を迎え、鉱専側は鉱山業界や財界OBを東にして、中央の大学審議会に最後の揺さぶりをかけていた。

しかし、鉱専側が主張する独自性や特殊性はもはや色あせていて、誰の目にも敗色が濃厚だった。地元ではすでに勝敗がついたとして、師範側はしてやったりと北叟笑み、鉱専生らは、まるで格下げにもなったようにしゅんとなってしまうたのである。

鉱専生らの気落ちには、過去から引きずってきた安っぽいエリート意識と差別意識が根底にある。師範生らの笑いには、冷や飯食らって忍従を強いられた積年の恨み辛みが籠っている。私はそんな驕りや怨念がらみの誘置合戦を冷めた目で傍観していたが、鉱専生らの誇りを捨てたような自我喪失状態は目に余るものがあった。

一方、師範生らの急激な左傾化も全く主体性がなくて、とうに見切りをつけていた。

香雲亭にいたころ、二の丸広場で学園民主化の決起集会を目撃したが、彼らは全学連の支援者を神か救世主のように奉っていた。

「民主主義の学内導入を阻む者は、誰であらうと抹殺せよ。乱を恐れるな。乱に乗ぜよ」

全学連の東大生らは、騒げ暴れろと煽るだけで論理も筋もあつたものでない。要するに火事場泥棒に徹しろと焚きつけているのである。

師範のリーダーもいただけない。ぬけぬけと、

「われら冷や飯食らいの春も遠からじ……」

と、泥臭い見栄を切ったのである。

私は一度に、全学連なるものにも師範の学園民主化にも失望したのである。

もともと私は、学業よりはアルバイト、資本論よりはヘルマン・ヘッセにのめりこんでいた無頼派である。何よりも拘束を嫌い、時を得顔のイデオログも半ば蔑視していた。いまさら、師範の過激派に土足で踏み込まれたのではたまらない。また、やがてくる新制大学生らに我物顔されたのではかなわぬ。

そのため私は、新制大学生らには鉦専本来の地のままに、先輩と先住者たる特権を行使して堂々と君臨せよと発破をかけたのである。また自治問題は大学生が量的に優勢になる来年以降はともかく、師範を含む学外組織との連携は体質的に論外だとして、結着をつけた。

一方、目前の学制切り替えで浮足立つ学校側には、「最大のデモクラシーで、われらが最後の花道を飾るべし」と、談じこんだ。

かくて、秋田鉦専の終幕に、「史上最悪の採鉦科」が舞台に踊りたのである。

学園民主化の火の粉を振り払い、折角類焼を防いだのに教官らの顔色は冴えない。まだ胡散臭い目つきで、私らを睨んでいた。

学生大会の数日後、卒業生の送別コンパが採鉦科教室で開かれた。酒抜き茶話会で、教官らがあらまし招かれた。

教官らの説話が終わったころ、私は濁酒の一升瓶を肩にひっかっついて乗りこんだ。

そのまま壇上に進み、祝辞を述べた。

「三年生の諸君、卒業おめでとう。何よりも餓えと貧困からの解放はご同慶にたえない。我ら傲岸不遜

な後輩は、思ったより穏便なご指導に深く感謝申しあげている。諸兄らより数段できが悪く、諸先生から史上最悪とひんしゆくを買っている我らだが、腕と気っ風だけはどうやら戦前の伝統的レベルにある。それを固持して栄えある鉦専の終幕を飾るつもりだから、心おきなく菓立って貰いたい」

最後は半身に構え、共産分子の黒幕と目星をつけていた一年生を睨み据えていた。

壮行の辞を終えるや、鉦専節ならぬ常磐炭坑節を高唱して、悠然と降壇した。

7

北国の春は、ゆっくり、のっそりやってくる。ときどき足踏みしては、何処からか残りの雪を運んでばらまいたりする。気紛れでもある。それでも千切れ雲の間からこぼれる陽ざしは、日一日と眩しくなると少しずつ人の頬をゆるませていく。そしてやっと桜が咲けば、それ来た、逃がすものかと人々はどっと駆けだす。逃げ足も早い春なのである。

秋田駅に近い公園には、せっかちな旅行者が春を早く運んでくる。旅の合間に、春を探しにくる人が多いのである。夏の竿頭祭に各町内会の竿頭が勢揃いして、祭の興趣が最高に盛りあがるのも公園の濠端通りである。

私は、千秋公園の二の丸広場で、鉦専最後のファイヤーストームを指揮した。

二年と三年生だけの約三百の行列は、太鼓の音と共に悠々と校内から町に押し出した。ゆっくりもっこりは鉦専の伝統的ペースで、濠端通りを練り歩くころはもう日が暮れかけていた。太鼓と寮歌はたそ

がれ空をどよめかし、柳並木の歩道に人垣ができれば、車の流れもつと遠慮してそばにずれた。

行列から数人の学生が飛びだした。と見る間に彼らは、揮一本になって濠に飛びこんだ。そして行列の歩調に合わせて、悠然と抜き手を切った。それも恒例の添え物である。

伝来のよれよれの羽織袴で、私は最後尾にいたが、来年は大学生らが幣履のごとく捨て去るかと思えば胸中は複雑だった。

花見提灯に灯がともると、先発組が用意した井桁のかがり松が一斉に炎をあげた。

「今宵、此処に、我ら、最後の鉱専生の若き血潮、春らんまんの花と競わんかな。いざ歌わんかな。いざ踊らんかな。一。二。三!!」

私は声をかぎりに絶叫した……。

五月初め、文部省が全国新制大学の入試日を発表した。授業開始は七月中旬だという。

秋田鉱専と上田繊維専門の二校だけが、再審議中で保留された。両者ともまだ執拗に、単科大学への陳情を続けていたのである。

だが鉱専生の中で、それに目を向ける者はいなかった。それよりは新学制になって、旧制専門学校生は斬り捨てられるのか冷や飯を食うのかと、誰もが将来の身分的処遇の格差を計りかねて、学制改革に遭遇した困惑と不運を持って余っていたのである。当然、他人事に目が届くはずがなく、学生相互間はおろか教官の間にも、自己本位で退廃的な空気が横溢していた。

私は文化部や運動部の活動を中心に、学内の横断的な結束気運を盛りあげていった。

各部の予算分捕り合戦が、大採めした。

ラグビー部の連中は職権を乱用しろと私をけしかけたが、出ると負けの戦績ではてんで相手にならない。それはどの運動部も同じで、結局は演劇部や音楽部など、地域交流の大義名分を挙げた文化サークルに根こそぎ奪われてしまった。

そのため運動部は、千秋公園の濠端の県立記念館を借り切り、ダンスパーティーで部費を荒稼ぎするという大胆な試みにでた。

私は学生服を借り着して、一週間も県庁に日参した。そしてこれも受け売りのダンス文化論なるものを捲し立て、粘りに粘って会場の無料借用に成功した。

ダンスパーティーも大成功で、満員の盛況だった。学内の軟派学生らはもちろん、学内こそって若い女性層の動員に協力したのである。

大学昇格運動でも、これほど盛りあがったことがない。はからずも女性がらみで、初めて全校生が一つに燃えたのである。

しかし、パーティーが始まると、ダンスも知らない私などは即刻ご用済みだ。運営委員らは私一人を置いてきぼりにして、我れ先にと女性陣に突進、パートナー争奪に血眼になっていた。まるで私は道化師。そつと会場を逃げだし、濠端の暗いベンチで独り無聊を慰めた。

濠の水面で、会場から洩れる灯影が、甘いメロディーに合わせて気だるくゆらめいていた。まわりの

夜景は、生暖かい風の中で重たく沈んでいた。雨が近い甘酸っぱい夜だった……。

梅雨が明けると、千秋公園は一足先に夏めいて人出を誘う。濃緑^{濃緑}はたわむほど豊かで、それをさわさわと揺らした風が濛の水面をかすめ、柳並木の萌黄色の枝葉にしなやかにまとわりつく。つかの間だが、北国の初夏はさわやかなうえにもみずみずしい。

とりわけこの年は、映画化されたばかりの「青い山脈」の軽快な旋律が通りに流れ、道行く人の心も足取りもはずませていた。

そんな日曜日、私は二人の仲間と濛端通りを歩いていた。徹夜麻雀で疲れた目には折角の陽さしもやけに眩しく、歩くのも大儀だった。集合時間におくれ、八橋競馬場の発送係のアルバイトをふいにしてしまったのである。

私たちの前を、数人の女子高生が道幅いっぱいになって歩いていた。良心的軟派と任ずる仲間が気やすく声をかけ、ボートに誘った。彼の早業に呆れたが、彼女らがいとも簡単に応じたのには驚いた。あるいは多勢に無勢と、私を見縊ったのか。県北大館市の桂高校の音楽部三年生で、合唱音楽祭の放送録音どりを終えての帰り道だという。

三艘のボートに分乗することになったが、私は女が苦手なうえ、ボートを漕いだこともない。さんざんためらっていると群れの中から、「ンだら、私、こぐすか……私、こぐす」と言っ、やけに元気な子が飛びだしてきた。

真っ黒い日焼けした真ん丸顔の中で、大きな日玉が挑むように私をにらんでいた。彼女の名は、「和田恵子」。

一語に乗った友達の話では、歌も踊りも学校ではピカ一の人気者らしい。男子高生から一番付け文が多いのも彼女だそうだ。

「それになす。大映のニューフェイスに合格してるために、映画スターになるのだすべ」

「あえい、嫌だごと。そだごとまで教えて」

友達の饒舌に恵子がすねて、駄々っ子のようにオールで水面をばしゃばしゃ叩いた。

私は、驚いて黒ん坊を見直した。

そういえば鼻はひときわ高く、彫りの深い顔立ちである。長い黒髪を風になびかせてオールを繰る横

顔は、木彫りのアイスの娘にも似た妖しい野性美を漂わせていた。

私がじろじろ見ると、またしても彼女は、

「あえい、しょうしい（恥ずかし）ごと！」

と言っ、オールで駄々をこねた。

その後、一団となって公園を散策した。

私と恵子が自然とカッブルになって、一足おくられてみんなを追う形になった。

私は米軍放物資の野暮な服装で、頭はぼさぼさ。そのうえ靴はラグビーのスパイクときている。他

の二人は学生服で頭はリーゼントスタイル。とても勝負にはならない。

気障だとは思ったが、カールブツセの「山の彼方」とヘッセの「霧の中」を原語で吟じて、せめても
の穴埋めをした。

千秋公園はわが庭も同然だが、現実の女性の登場は初めてである。それどころか女性と肩を並べて歩
くのも、生まれて初めてだ。

平静でいられる訳がなく、頭の中では半月前のダンスパーティーでのビエロの嘆きも何処へやら、早
くも彼女と華麗なワルツを踊りだしていた。

別れしな、社会科レポートの代作を頼まれた。テーマは、「社会と教育」である。

三日がかりの労作となった。的を絞りきれないテーマであったのと、女子高三年生の発想と文体に似
せるのに苦勞したのである。

それでも彼女宛の便りでは、さりげなく、（これでいいかどうか。取捨選択はご随意に）と、精いっ
ぱい気取ってみせた。

折返し、恵子から礼状が届いた。

『霧の中って詩はともさびしく聞きました。私はそんな霧の中では泣きだしてしまします。ほん
とは淋しがり屋の泣き虫、弱虫なんです。そんな私の泣き言や独り言。これから聞いていただけな
いかしら。そうだと嬉しいんだけど。勝手かしら……でもお便りくださいね』

花模様の小振りな封筒を手にしたとき、もう私の胸は躍っていた。ピンクの便箋の四隅には、透かし
のバラが浮かんでいた。文字や文体はなまめかしく、女子高三年生ともなると、こうも色香がひとりで

ににじみでてくるものかと目がくらんだ。恋とか愛とかの文字は一つもないが、行間にはそれが無いよ
うで有るような、有るよで無いような、ひそやかな思わせぶりまでにじんでいたのである。

なんともソフトタッチの便りに、私はたちまち恵子のとりこになってしまった。

8

九月、学内は新制大学の鉱山学部生の入学で湧いた。学芸学部は師範校と同居である。

私は学生会の委員らと全教室を一巡して、

「我ら鉱専生は学芸学部は眼中にない。また全学連も眼中にない。いささか頑迷だが、学生会は限りな
くもデモクラシーだ。学生会の会費は否でも応でも頂戴するから、宜敷く」

と、やや強面で、歓迎の辞を述べた。

大学生は、全部お揃いの学生服だ。私らはてんでばらばらで、特攻崩れか閤屋。時代の推移を歴然と
浮き彫りにした新旧の対面だが、大学生らの存在感は意外なほど希薄だ。素質的にも優位性は感じられ
ない。学制改革は、まずは揃いのニューラルックで、見ばえよく御登場という印象である。

本家本元の採鉱科が最後になったが、驚いた。なんと最前席に女子学生が二人、化け物でも見るよう
に目をぼちくりさせ、ちょこなんと座っているではないか。

「ああ、世も末……。俺はこんな苦手」

私はそばの委員に挨拶を押しつけ、さっさと退散してきた。

学生最後の秋は、公私とも多忙を極めた。

まず新入生の歓迎もかね、各科対抗の競技会を大々的に開いた。高田満が相撲とボクシングであっさり個人優勝をさらい、庭球と卓球を除く全種目で採釵科が圧勝した。

また、県立記念館で全県下の高校音楽祭を主催した。だが桂高校のエントリーはピアノ独奏だけで、恵子との再会は果たせなかった。

黒髪を胸もとまで垂らしたピアノ奏者に、恵子宛のプログラムを托したが、彼女は、

「恵子、大映のニューフェイスになるかどうかで、だいぶ迷っているらしいわ。ご存知？」と、探るようにしてニッコリ笑った。

知らないどころか、私の最大の関心事だ。

恵子の母親は南部津軽藩の士族の出で、秋田師範に飛び級で入った評判の才媛だったらしい。亡父は函館師範卒で、スポーツも万能ならば、ピアノやヴァイオリンもこなすモダンボーイだったという。美男美女のおしどり教師として近隣に聞こえていたそうだ。

母親は夫の没後、和裁塾を開いて、恵子を中心にさむ五人姉弟を育ててきたが、躰は古風で厳しいらしい。映画界入りも猛反対されていると、恵子は便りでこぼしていた。

一方、大映では永田社長直筆の要請文を二度もよこして、卒業後も待っていると、並々ならぬ執着を見せているという。

彼女が迷うのも無理はない。

私が頭で描くオリジナルロマンのシナリオも、いつもその辺で頓挫してしまうのである。

音楽会の直後、盛岡で開かれたラグビーのインターハイに遠征した。

盛岡は、航士校入校時の隊付き演習地である。当時、決死敢闘の噂にはおびえていたが、地獄中隊とは気付くよしもなかった。

なにしろ、中隊長が私らに与えたレポート課題が、「兵舎内私刑の実態と改善」だったのである。むしろ、そんな設題に人間味や進歩性を感じて、生徒たちは航士校教育に夢も希望もつないだのである。

ところがあにはからんや、盛岡の兵舎に落ちつくなり、猛しごきの火蓋が切って落とされた。私は不寝番でちょっと姿勢を崩しただけで、猛ビンタを張られた。そのうえ、将校生徒の襟章ももぎとられたのである。

生徒の一人が脱走した。

しごきは一段と加速もすれば、どう猛にもなった。兵舎前に整列させられ、A大尉らに「貴様らは、豚鬼豚腹の輩」と罵倒されて、軍刀のこじりで次々とのけぞり倒された。

兵隊らの私刑を観察するところではない。

逆に私ら士官候補生が、兵隊たちの同情を一身に集める結果となったのである。

強行軍のすえ、やっとたどりついた小岩井農場の牛乳が、なんとおいしかったことか、なんと濃い牛乳だったことか。それだけが唯一の甘い思い出として残っていた。

あの兵舎はどの辺だろうと、試合場までの道すがら忙しく見回したが、さっぱり見当がつかない。猛しごきと屈辱に耐えるのが精いっぱい、当時私らは、何処も、何も、見えていなかったのではなからうか。

試合は、一回戦で呆気なく敗退した。

9

就職が完全に出遅れてしまった。

同級生の大半は花形産業の炭砒を迷わず選び、希望会社への就職を決めていた。

常磐炭砒に戻る気はなかった。祖母の干渉の及ばない所に離れようと思いつめていたので、初めから常磐は私の視野に入っていなかったのである。

おそまきながら三菱鉱業と同和鉱業の金属鉱山を当たったが、「ご縁がありませんなあ」と、物の見事に門前払いを食った。

学科試験もなく、いきなり面接で全学連系の自治会長並みの質問攻めを受け、けんもほろろにはねつけられたのである。

この年ほど、「赤詮義」が厳しかったのは後にも先にも例がない。

私が学生会長になった当座は、学校側と学生の急進派の双方が、私の思想的動向を見きわめようと執拗にまとわりついた。

うるさくなった私は、断食と称して、学校の用務員室の隣の小部屋に一週間ほど籠城した。その際、

図書館から、硬軟とりまぜた書籍を小脇に抱えるほど持ちこんだ。

様子をのぞきに来た急進派は、マルクスの資本論が積んであるのを見て、わが意を得たりとしたり顔で引き揚げた。厚生部長兼公民科教官は、デュイイの教育学概論とヘルマン・ヘッセの詩集が同居しているのを見て、小首をかしげながら引き上げていった。彼は就職関係を一手に握る権力者だったが、私はそりが合わず、学生会運営で何度も衝突していた。

恐らく学校側は、「臭い物には蓋」と、手荒に赤まがいの烙印を押したのだろう。

共産分子の蚕食も全学連も蹴散らしたのにも思うと業腹だが、もともと品行方正・学術優等の部類では全くない。これも自業自得だろうと、私は就職を諦めた。

その後、教官にせつかれて、岩手松尾鉱山と北海道岩内炭砒に出掛けた。

入社試験は旅費も宿泊代も相手会社が負担し、おまけに日当がつく。言わば無銭旅行で、これほど楽しめるアルバイトもない。

同行者は高田満と用瀬憲太郎。高田は売れ残りの筆頭だが、用瀬もどうにかなるさの楽天家で、なにやら人生を達観しているような大人の風格があった。海軍機関学校出で、九州は福岡の医者の子である。

初めから物見遊山気分、松尾の私鉄では絨毯を敷きつめた豪華な先頭客車に乗りこんで、安物ウィスキーでおだをあげていた。他に乗客は、新聞で顔を隠して寝込んでいる老人一人だけだった。

終点駅のホームから駅舎の外まで、制服姿の会社員が行儀よく整列して列車の到着を待っていた。そ

して相客の老人がホームにおりると、一斉に軍隊式の大号令が飛びかい、老人は拳手の敬礼で奉迎されていた。

なんと、老人は松尾鉱山の社長だった。

客車は、社長の専用車だったのである。

私ら三人が、揃って打ち首になったの言うまでもない。翌日の面接では皮肉を言われっ放しで、頭をかきかき、早々と退散した。

岩内炭礦は積丹半島の日本海側のつけ根、漁港岩内町のはずれにあった。

偶然、青函連絡船の待合室で、岩内を目ざす盛岡工専ラグビー部の四人と鉢合わせをした。同じ穴のムジナかと感心したら、彼らの方がうわ手で、麻雀牌をご持参だ。

早速、連絡船の甲板上で、寒風も人目も物ともせず、麻雀のインターハイを開幕した。

ときに師走の十日すぎ、函館本線から岩内線に乗り替えたころは、猛吹雪となった。岩内駅に着くと、雪は猛然と足元から吹きあげてきた。凄まじい北海道の猛威に、七人の強兵は数珠つなぎになって悲鳴をあげた。

それでも宿につくや、すぐ延長線にもつれこみ、えんえんと朝方まで続いた。

翌日、七人は誰一人として、答案用紙に真剣に向かっている者はいなかった。「基幹産業人としての抱負」という設題に、私は「いまだ白紙状態」とだけ書いて提出した。

「ご縁がないですなあ。お次、どうぞ」

面接室から、七人は次々と追いだされた。

私は、高田らと青森駅で別れ、常磐線回りの東北本線でそのまま帰省した。

「どこをほっつき歩ってたんだ。どした了見なんだ!! すぐ大越さん家に挨拶にいげッ」

家に着くなり、祖母の雷が落ちてきた。

死んだ祖父は、常磐炭礦社長の大越家の血筋を引いていた。祖母が社長の老母に頼み、三日後に追っ

た採用試験を受ける手筈をつけておいたというのである。

もはや私も観念するしかなかった。母に引きずられるようにして、挨拶に向向いた。

飛び込みの形で学科試験を受けたが、案の定、面接で労務課長にしつこくからまれた。

学生運動についてはどうにか切り抜けたが、誘導尋問に乗って、うかつにも生半可な労働組合論を振り回してしまった。この時点、私の念頭には、発破屋時代に見聞した労組乱立の幼稚な馬鹿騒ぎしかない。すったもんだのすえ単一労組が誕生したが、統一劇の舞台裏では、会社労務筋のある有力者が主導的役割を果たしたとも聞いていた。そのため、戦後の労組は占領軍の落とし子で、発生的に主体性がな

いなどと貶してしまっただけである。

すでに常磐は、労使協調の健全経営を誇っていたからたまらない。労務課長が、色をなして論争を吹っかけてきた。

同席していた敏専先輩の敏長のとりなしで、どうにか最悪事態は免れた。

それにしても私は、入社前から、早くも労使双方に睨まれる問題児になってしまった……。

恵子との文通は、二か月も途絶えていた。

自然消滅の形だが、袋小路に迷いこんで二進も三進もいかない独りよがりのロマンに、我と我から見切りをつけた部分がかかりあった。なにぶんにも相手は、いまにも大輪の花を咲かせそうな素材で、所詮は高嶺の花だ。

就職が内定後、この年初めて発売されたお年玉つき年賀葉書を、彼女にだした。

『春からはしがない坑内屋。貴女とは無縁な世界で、ひたすらご成功を祈っています』
年賀にはふさわしくないが、「ザ・エンド」と別れの終止符を打ったつもりである。

掛けがえのない青春が一つ、手元から離れていった。気に染まない就職もそうだが、こうして一つ一つ、完全燃焼しないまま締めくくっていかねばならないのかと思うと、空しさにも似た卒業期の寂しさが、初めてじわりと私の胸に迫ってきた。

ところが正月（二十五年）明け、当てにしていなかった恵子の便りが舞いこんだ。

『木枯らしのように冷たい冷たい人……』

ふた月も、木枯らしの中で震えていました。

暮れには、公会堂で「フランチェスカの鐘」を歌いました。涙がひとりぽろぽろこぼれてきま

した……。忙しいと一言でも言ってくださったなら、そんなこともなかったでしょうに……。でも安心しました。今夜の雪は、とつても楽しい夢を見させてくれるみたい……。

学校に戻ったら、是非おいでください。母がお会いしたいと言っております。名物のきりたんぼで大歓迎ですって……』

のっけから、痛烈な一撃だった。

たった数行に、なにやら急に大人びた女の情念が凝縮されている。甘く激しい戦慄が、たちまち私の若い血を奔騰させた。

私は、「これでさよなら」と、年賀葉書で言ったつもりである。それなのに恵子は素知らぬふりで、「小夜奈良」と結んで、いつもの調子で微笑っている。「まだまだ後があるんだわ」と、小首をかしげて続きをねだっているのである。

また、彼女がメゾソプラノで歌う「フランチェスカの鐘」は独得の哀愁を帯び、学校の内外に多くのファンがいるという。

涙ながらの歌に、人は知らず私は恋の端をつかみ、恋の坂を一気にのぼりつめた。

もう帰心矢のごとく、私は冬休みもそこそこに、わくわくとして帰校の途についた。

奥羽本線回り青森行き列車は、ソ連抑留者たちが座席の半数を占めていた。

半年前の帰校時の常磐線でも、私はソ連からの引揚げ列車に乗り合わせたか、そのときは抑留者たちが全座席を占領していた。

彼らは通路を埋めた一般乗客には目もくれず、誰もが厳しい顔を車窓に向けていた。彼らは胸中を少しものぞかせまいと、目に見えない壁を互いに張りめぐらしているようで、全く取りつく島もなかった。

座席も無言なら、通路側も完全に沈黙。

あまりにも重苦しい空気を破って私は、「ご苦労さまでした」と叫んだあと、蛮声を張りあげて「常磐炭坑節」を彼らに捧げた。

まばらな拍手が通路から湧いたが、引揚者たちは身じろぎもせず、能面のような冷たい表情でそっぽを向いていた。見事と言うべきか、さすがというべきか、驚くべき無反応、恐るべき統制ぶりだった。乗客らはただただ気圧されて、また貝のように口を閉じたのである。

半年前と比べると抑留者たちは、おだやかな表情で一般乗客と談笑していた。これが同じマルクス、レーニンの筋金入りとはとても信じられないような、実になごやかな風景だった。

私は、二年生委員に会務を引き継いで、学生会から手を引いた。

求めに応じ、決別の辞を会誌に寄せた。

『情熱の詩人ヴァイロンにならない私も叫ぶ。』

秋田よ、われ汝を愛す。数多の暇はあるがまま……と。あえて鉦専とは言わない。八橋の油と泥よ。大八車を持て余した四つ角よ。秋田警察署よ。千秋公園の濠端よ香雲亭よ。はたまた、地にし

みた汗と汚辱よ。さらば、さらば……。

わがロマン、青春の夢は、路銀も尽きてついに実らざりき……』

後輩が、「先輩でも思い残す事があるですか」と、怪訝な顔をして聞いてきた。

「もちろんさ。ヴァイロンのように、放蕩者になり切れなかった。不完全燃焼さ……」
後輩が、変な顔してうなずいていた。

例年、学生会々長は校長に招かれて慰労の接待にあずかる。私は、秋田大学の初代学長の宿舎に招かれて夕食を共にした。

池田学長は冶金学の世界の權威で学生の信望が厚いが、意外なほど気さくで温かみのあるお人柄だった。平易な言葉で技術者が目ざすべき道をさとされ、新著作の「人間工学」を署名入りでいただいた。

機械装置や作業環境を人間の特性や能力に合わせるのが人間工学だが、何よりも人間そのものの勉強と理解が技術の原点だと強調していた。高名な工学博士が「人間」を前面に押しだしてきたことに、私は胸を打たれた。

はからずも最後の最後に、初めて胸にしみる生きた講義に出会ったのである。

二月半ば、招きに応じて、私は大館市郊外の恵子の家を訪れた。秋田から大館までは汽車で三時間ばかり、駅から家までは、米代川沿いに歩いて一時間もかかった。

「あえー、遠い所、よくおざったしなあ」

恵子はすらりとした長身だが、母親は小柄で典雅な秋田美人だった。未亡人にありがちな気負いはなく、それでいて凛乎とした清澄な品格が全体ににじみでている。北国の厳しい風雪をしのぐところも澄み切るものかと、私はたじろぐ思いで居ずまいを正した。

恵子は、私をすっかり母親に委ねていた。

母親はしきりに茶を勧めてきた。茶がもてなしの中心におかれ、話は茶のあとから、ゆっくりしたテンポでついできた。

話が、秋田師範の現状に及ぶと、彼女は、

「昔から冷や飯食らいといじけた所があつた。でもそんな骨なしではなかつたしなあ」

と嘆いた。戦後初の女性教育委員である。

初めて、きりたんぼを賞味した。最上客へのもてなしだそう、恵子の兄が鶏の首を手際よくひねって、肉を分けた。旧制中学卒業後、すぐ銀行入りしている。長姉は私と同じ年で、小学校の教師だ。口も手も達者に動き回り、いながらにして長女の貫禄がある。その家で恵子は端役で、二人の弟妹と一諸に姉の号令できりきり舞っていた。

筈の実だというトンブリも、山芋についてきた。濁酒も出た。一家をあげての大歓待に気を許し、私はがつがつ食べ、大いに飲んだ。

その家にいる間は母親とばかり話しこみ、恵子と二人きりになることはほとんどなかつた。母親は私が陸士出身ということにもつばら関心を持ち、それがあたかも何よりのクレジットカードのような思い

入れを示した。

翌日、恵子と姉が、隣りの駅まで見送ってくれた。恵子だけでは、また大館駅では人目がうるさいからという母親の配慮である。

恵子だけがホームまでついてきた。それは姉が気をきかしたのだろう。だが口下手な私は、折角の時間もなくに生かせなかつた。

私の舌足らずを責めるのか、恵子は赤いマントに頬を埋めたまま、大きな目でデッキの私を睨んでいた。

汽車が動きだすと、やっと赤いマントから「小夜奈良」の右手がそっと出てきた……。

彼女との文通は、残りの日も惜しむように忙しく続いた。私は別れしなごちなさを補い、さらには歩を一步進めて希望をあとにつなぐ証を得たくて、言葉を選ぶのに四苦八苦した。それでいて結果的には、いつも愛とか好きとかの周辺をうろついているだけの散文になり、思いのたけをなかなか打ち明けられなかつたのである。

恵子はそれをもどかしく思うのか思わないのか、日常的な出来事をモチーフにたおやかに迫ってくる。淡々としていて、恨み言もなければ物欲しげでもない。

私は、じりじりもすれば疲れもした。

ところが時間切れ寸前、恵子から再度の招待を受けた。彼女の母が、私と恵子の卒業祝いを一緒にしてくれるというのである。

その便りの末尾に、

『……大映の誘いは断りました。それよりは音楽学校に進みたくて、裏の畑で発声練習を続けていきましたが、それも止めにしました。姉と九州の従兄の結婚話が進んで、どうやら姉のあとがまの代用教員にされそうです。お先、真っ暗……』

今度は、これも秋田名物のだまこちですって。お楽しみに……。』と、泣き言がつけ足してあった。

朝鮮から引揚げた伯母一家は福岡県中間市に定住し、高商卒の従兄が大正鉱業中鶴炭鉱に事務職員として勤務しているという。

はからずも炭鉱が、切実な問題として和田家に急浮上してきた。堂々めぐりのわがシナリオにも、俄然展望が開けてきたのである。

卒業式当日、私は高田に代理出席を押しつけて、満を持して大館市に向かった。

高田も式に出渡っていたが、「お前はお情けなんだから、これだけは義理を欠くな」と言いくるめた。その私にしても成績は下の下で威張れたものではない。どっちも粗大ゴミのように店閉まいのバーゲンセールに見切り放出されたも同然である。

恵子の家では、前回以上の歓迎を受けた。

彼女との文通の内容は、母と姉には筒抜けだったらしい。もはや機は熟したと見たか、あるいは先を

急いでか、何かと恵子を前面に押しだしてきた。母親は、「人一倍感受性が強い娘で、それが心配の種です」と、暗に私への積極的なリードを期待しているようなことをほのめかしたのである。

祝いの席では、私と恵子が正面上座に並んで座らされた。恵子の兄が「秋田おぼこ」をうたい、私は「航空百日祭」でこたえた。

恵子が腕を前に組み、「フランチェスカの鐘」を切々と歌いあげた。歌い手としても、聞きしにまさる素晴らしい素質である。それに比べれば私はあまりに器量不足で、身のほどを弁えない高望みをしているのではないかと、またまた自信を失いかけてきた。

翌日、恵子の母に丁寧に礼を述べて、その家を辞去した。結局は誰よりも話がはずみ、誰よりも昭和二年生まれの思想と行動に共鳴してくれたのは母親である。彼女の前では、気持ちも口も楽にほどけたから不思議だ。

姉が、また私と恵子のエスコート役となって駅まで同行した。「青い山脈」のメロディーを口ずさみながら、彼女は私と恵子を置き去りにして先を急いだ。

雪の細道は二人が並んで歩く幅がなくて私が先になったが、空回りする会話をもどかしがる気配が痛いほど背中に刺さってきた。

米代川の水量は豊富で、田園ばかりの銀世界をぶっきら棒に左右に分け、我一人往くという感じで滔々と流れていた。

勢い余る清冽な奔流も早く早くと私を急かしたが、それでも肝心の言葉は、ついに駅のホームまで喉

にひっからんだままだった。

清水の舞台から飛びおろる思いでそれを口にしたのは、汽車がホームに滑り込む寸前である。

「言いだせなくてご免、好きだよ。大好き」

「……………?!」

マントに深く頬を埋めて、半ば不貞腐れていた恵子の目が、真ん丸に見開かれた。

すかさず私は、彼女に握手を求めた。

はらりと二つに割れたマントの中から、右手が真っ直ぐ伸びてきた……。

Ⅳ 美女と野獣

1

昭和二十五年四月、私は常磐炭硯に入社、磐城炭業所湯本炭の採炭係に配属された。

同期入社 of 学卒者は事務系も含めて十五名で、野地智は内郷炭に配属された。採鉱科にはまれな品行方正・学術優等の堅物である。

炭硯は全盛期を迎え、増産に次ぐ増産で湧いていた。全国の各炭硯はこぞって設備投資を競合し、石炭生産量は国内一次エネルギー総量のほぼ半分に達しようとしていた。

一般産業界は、前年四月以来の「ドッジ・ライン」のデフレ政策で深刻な打撃を受け、失業者が続出していた。独り炭硯だけが別天地で、わが世の春を謳歌していたのである。

もはや炭硯は、職業別ランキングで最下位に貶められていたような戦前の賤民社会ではない。国と占領軍の手厚い優遇政策で、いち早く戦後の飢餓線から脱したばかりか、一気に産業界のリーダーとして檯舞台に躍りだした。労使関係や賃金体系にしても、労働基準法の整備や激しい労働攻勢で、どの業界よりも開かれたものになっていたのである。

驚いたことに、常磐炭硯労働組合は、伝統的(?)な労使協調主義的健全組合主義で全国に名を売